令和八年度　長崎大学教育学部入学試験問題

国　語

注　意　事　項

試験開始後、問題冊子のページ数（表紙をのぞき、全二十一ページ）及び解答用紙（三枚）の枚数を確かめ、不備あるいは印刷が不鮮明なものがあれば新しいものと交換するので挙手すること。

一、試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないこと。

二、解答は、必ず問題と同じ番号の解答用紙に記入すること。

三、解答は明瞭に書くこと。

四、解答用紙は持ち出さないこと。

五、受験するコースによって解答する範囲が異なるので、注意すること。

一　次の文章は、村田沙耶香「素晴らしい食卓」の一場面です。それぞれの食文化を持つ登場人物たちが、顔合わせを兼ねた食事会をしています。読んで、後の設問に答えなさい。なお出題の都合上、表記を変更している箇所があります。

著作権保護の観点から
公開していません。

著作権保護の観点から
公開していません。

著作権保護の観点から
公開していません。

著作権保護の観点から
公開していません。

著作権保護の観点から
公開していません。

著作権保護の観点から
公開していません。

著作権保護の観点から
公開していません。

著作権保護の観点から
公開していません。

著作権保護の観点から公開していません。

村田沙耶香「素晴らしい食卓」

問一　波線部ａ～ｅについて、カタカナは漢字に、漢字は平仮名にそれぞれ直しなさい。

問二　傍線部１　著作権保護の観点から公開していません　とあるが、これはどういう意味か、簡潔に説明しなさい。

問三　傍線部２「同じ釜の飯」は慣用句であるが、次の①②について、点線部の意味を簡潔に答えなさい。

①　祖父からの誘いはまさに渡りに船だった。

② 隣のクラスのBさんとは、気が置けない仲だ。

問四　傍線部3 著作権保護の観点から公開していません について、登場人物たちはなぜこのように言っているのか。解答欄の空欄を、文中からそれぞれの字数で言葉を抜き出して答えなさい（句読点を含む）。

食文化は、（　　十七字　　）であり、
自分以外の食文化に（　　十一字　　）せずとも
自分たちが（　　六字　　）ことを確認するため。

問五　傍線部4 著作権保護の観点から公開していません について、「私たち」は、なぜ「夫」を「化け物を見る目」で見ているのか。次の選択肢ア～エのうち、最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　帰宅した「夫」が、食卓のものを好き勝手に批評したうえ、それらをごちゃまぜにして食べ始めたので、そのマナーの悪さに驚がくしたから。
イ　異文化を「薄気味悪い」と思うことを認め合い、異文化に迎合しないと決めた自分たちとは異なる価値観を持つ夫に拒絶感が湧いたから。
ウ　食事の際には、栄養だけでなく文化も摂取するべきと言う「夫」が、口に合わない料理を食べる執念に対して、畏敬の念を感じたから。
エ　自分たちには生ゴミしか置かれていないように思える食卓を、「夫」が恍惚として「素晴らしい食卓」と言ったので、正気を失ったかと思ったから。

（以下、中学校教育コース受験者のみ解答すること）

問六　二重傍線部A［著作権保護の観点から公開していません］について、「私」の対応に対する「沢口夫妻」の心情として最も適切なものを次の選択肢ア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　信じられない見た目の料理を出されたことで、息子の婚約者とその姉の食生活や常識が自分たちと違うことが分かり、恐怖を覚えている。

イ　自分たちの口に合う料理が出てくると思ったが、食べ物とは思えない料理が出され、言葉を失うほどの衝撃を受けている。

ウ　自分たちには到底受け入れられない食事だが、自分たちを気遣って出されたことも理解できるので、どうしたらいいかわからない気持ち。

エ　期待したような料理が出てこないばかりか、顔合わせの場にふさわしくない料理を出され、歓迎されていないのかと憤る気持ち。

問七　二重傍線部B［著作権保護の観点から公開していません］と、二重傍線部C［著作権保護の観点から公開していません］が描写されていることによる効果を、「圭一」と「夫」の食文化に対する考え方と関連させて、八十字以内で簡潔に答えなさい（句読点を含む）。

二　次の文章は、江戸時代中期の儒学者である竜公美の「真字古今集をあげつろひし詞」の一節である。公美の家には『古今和歌集』の歌を古い時代に万葉仮名で書き記した真字本が伝わっていたが、自らの家に伝わるものの他に真字本の『古今和歌集』が伝来していないか探していたところ、公美は今井自閑という人物が所持しているに違いないことを突き止める。しかし、自閑所蔵の真字本は、その没後に行方が分からないままとなっていた。以下は、それに続く話である。

読んで、後の設問に答えなさい。なお、出題の都合上、表記を変更したところがあります。

今年安永三年の夏、京出雲路の祠のほとりにいます菊池春林と言へる人①、このたびあらたに『古今集』を真字にうつしかへて童子に与へしとて、事々しく跋文を添へて上木しぬ。公美思へらく、家に秘め置きし真字本現にあるに、なほ一本を尋ねまほしくて、Ⅰ年頃漁り求むる②に、そは出で来ずして、思はずもあらたにⅡ物しぬる人のあるよと不思議にも又嬉しくも思ひて、Ⅲやをら一冊読みて見るに、わが家に秘し置ける真字書の『古今』と、つゆ違ふ所なく同じきものなり。さてさて不思議なる事なれ。ⅰかくもあらたに書けると昔のものと同じかるべうも有るまじき事なるに、いかなれば同じきやと深く案じみる③に、始めて其の説を得たり。まづ、この書家にありしは、真字に書きて傍らに注文ありて、題号「古今集真名字解」とあり。注ある故の名なり。このたび出版の書も「真名字解」とありて、号さへ同じ。しかれども、このたび出でしは、注はなくて真字の素本なり。よりて思へば、かの菊池春林いかなる人ぞや。大きなる盗人にこそ侍れ。この書は、わが久しく尋ねぬる、かの今井自閑老人が所持せる④本なり。それを、自閑死後いかにしてか、この人の手に入れしものなり。もしは自閑が類属にてもや有りけん、知らず。何分にこの書己が手にありて、外に知る人あるまじと思ひて、己が功とせんとて、今度わがあらたに真字にうつしぬると偽りしものなり。

されども、[ii]この人もと無見識なる人故に、この古本の真字書は、昔貫之（つらゆき）がせし真の『古今集』なる事は思ひもよらず、『古今集』もとより仮名書なるものとのみ心得、この真字書はたれぞ中世の人か、又は近世の人などがふと真字に直せしが、自閑が手にありしぞとのみ思ひて、しからば他人の功にせんよりは己が功にせんとて、このたび自己に真字に直しぬると偽りし事、疑ひなし。さなくては、わが家に秘め置ける⑤『真字古今』と露違ひなくあらん事の有るべうもなし。されど、[A]団子食ふものの跡隠す事知らぬ類ひにて、かの外題（げだい）はやはり初めよりのままにて、注もなきに「字解」と付けたるにても、偽りなる事明らかなり。初めの書は解あるによりて「字解」と名付けぬるを、今素本を「字解」と言へるは、物と名と違ひて、偽りと言はでも偽りなる事、計り知られぬ。かつこの書をみるに、[Ⅳ]中々今時の人の知らぬ事、ならぬ事、往々ありて、上古の人のせし事、明々白々なり。春林あまり[Ⅴ]浅まなる偽りは、かく言はでも知る人は知るべけれども、初学の人、又片田舎の書に乏しき方の人は、偽りを食ふ人もあらんかと、記しぬる⑥もの、しかなり。

（竜公美「真字古今集をあげつろひし詞」）

【注】

菊池春林……江戸時代中期の学者。

真字（まな）……真名。漢字のこと。

跋文（ばつぶん）……書物の本文の後に記す文章。

上木……書物を出版すること。

注文……本文に関する説明・解釈等を記した注の文章。

古今集真名字解……菊池春林が安永三年（一七七四）に出版した書物。図版Ⅰ・Ⅱ参照。

素本（そほん）……注釈が付けられていない本のこと。

今井自閑……今井似閑のこと。江戸時代中期の国学者。

類属……親族。

中世……鎌倉・室町時代のこと。

近世……近頃の世の中。

外題（げだい）……本の表紙に記されたその本の題名のこと。

上古……平安時代以前のこと。

【図版Ⅰ】菊池春林『古今集真名字解』表紙

＊画像著作権保護の観点から図版は非公開とします

【図版Ⅱ】菊池春林『古今集真名字解』本文冒頭

問一　二重傍線部Ⅰ～Ⅴの単語について、本文中の意味としてもっとも適切なものを、それぞれ次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ　年頃　　ア　長年の間　　イ　近頃　　ウ　年齢の程度　　エ　最近

Ⅱ　物し　　ア　話し　　イ　書き　　ウ　行き　　エ　来て

Ⅲ　やをら　　ア　おもむろに　　イ　不意に　　ウ　突然　　エ　びっくりして

Ⅳ　中々　　ア　かなり良く　　イ　中程度に　　ウ　とうてい　　エ　この上もなく

Ⅴ　浅まなる　　ア　驚きあきれる　　イ　ひどい　　ウ　見苦しい　　エ　隠し事が表に出た

問二　点線部①～⑥の「る」について、完了・存続の助動詞「り」が活用したものを三つ選び、番号で答えなさい。

問三　波線部ⅰ「かくもあらたに書けると昔のものと同じかるべうも有るまじき事なるに」について、「あらたに書ける」と「昔のもの」とが指し示す書をそれぞれ明らかにして、現代語訳しなさい。

問四　波線部ⅱ「この人」が指し示す人物を、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　貫之　　イ　自閑　　ウ　公美　　エ　菊池春林　　オ　初学の人

（以下、中学校教育コース受験者のみ解答すること）

問五　傍線部Ａ「団子食ふものの跡隠す事知らぬ類ひ」とは、どういうことを指して言っているのか。春林の行動に即して、百二十字以内（句読点を含む）で説明しなさい。

問六　右の話の話題にあげられている『古今和歌集』は、天皇の命をうけて編まれた勅撰（ちょくせん）和歌集である。次のア～コの選択肢の中から勅撰和歌集ではない和歌集を二つ選び、記号で答えなさい。

ア　千載和歌集　　イ　後拾遺和歌集　　ウ　貫之集　　エ　後撰（ごせん）和歌集　　オ　新古今和歌集

カ　詞花和歌集　　キ　新勅撰和歌集　　ク　拾遺和歌集　　ケ　金葉和歌集　　コ　金槐（きんかい）和歌集

三　次の文章は、江戸時代の漢学者林鶴梁（はやしかくりょう）が『史記』の項羽本紀を読んで書いたものである。読んで後の設問に答えなさい。なお、出題の都合上、表記を変更し、訓点（返り点・送り仮名）を省略したところがあります。

余少好二游侠一。後有レ所二感激一。折レ節学レ道。古之豪傑、済二大業一者、其規画既定二於髫齔之時一。余改レ過時年二十四。不二已晩一哉。及レ読二項羽紀一、乃知羽起時年亦二十四。非レ有二封侯之素、万金之富一、一旦抜二起閭伍之間一、率二諸侯一、滅二暴秦一、龍驤虎視鞭二撻宇内一。其志雖レ不レ成、何其壮也。嗚呼、大丈夫固宜レ如レ此耳。而羽死之年三十一。余今年三十一。与二羽死年一亦適同。噫、余以二羽起之年一而起、不レ能レ顕二於羽死之年一。碌碌俛二首於緗素間一。何才不才之懸絶也。

（林鶴梁「読項羽本紀」）

【注】游侠……義侠。
規画……計画、はかりごと。
髻齔……小児、童子。
閭伍……庶民、民間。
龍驤虎視……龍のように上り、虎のように見る。強い気概で天下に臨むこと。
鞭撻……励まし導くこと。
宇内……天下。
碌碌……無能で平凡なこと。
俛首緗素間……緗素は書物、俛首は頭をたれること。書物に頭をうずめ、読みふける様子をいう。

問一　傍線部①「改過」について、何をどのように改めたのか、本文に即して説明しなさい。

問二　傍線部②「嗚呼」と同じ意味で用いられている語を本文中から抜き出して書きなさい。

問三　傍線部③「固宜如此耳」を、すべてひらがな（現代仮名遣い）で書き下しなさい。

問四　傍線部④「何才不才之懸絶也」を、わかりやすく語を補って現代語訳しなさい。

問五　点線部「亦適同」とは、どのようなことを言っているのか。文章全体を踏まえ、「亦」の意味するところに注意して八十字以内で説明しなさい。

（以下、中学校教育コース受験者のみ解答すること）

次は、前の文章に続く文章である。読んで後の設問に答えなさい。なお、出題の都合上、表記を変更し、訓点（返り点・送り仮名）を省略したところがあります。

然吾想、使羽生於我邦、而遇今之昇平乎。則雖以羽之武力其不能立功赫赫如彼也必矣。⑤吾第当専力於斯文而已矣。⑥則不必以愚而終也。

【注】昇平……太平、平和なこと。
赫赫……さかんなこと、立派なこと。
斯文……文章。

問六　傍線部⑤「不レ能ハ立テ功ヲ赫赫カクカクタル如クナルコトノ彼ノ也ヤ必セリ矣」の解釈として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　わたしが、項羽と同じように立派で目立った功績を挙げられないことは間違いない。

イ　わたしが立派で目立った功績を挙げたとしても、項羽のようになれないことは当然である。

ウ　項羽が、劉邦のように立派で目立った功績を挙げられなかったことは言うまでもない。

エ　項羽が、戦国期に活躍したように、立派で目立った功績を挙げられないことは間違いない。

問七　傍線部⑥「吾第タダ当ニ専ラニ力ヲ於斯文ニ而已矣」とあるが、筆者はなぜ、自分は文章にのみ力を注ぐべきだと言っているのか、七十字以内で説明しなさい。